

課題番号 17

コミュニケーション活動中の気づきに関する神経メカニズムの解明と教育プログラム開発

[1] 組織

代表者：鈴木 渉

(宮城教育大学教育学部准教授)

対応者：杉浦 元亮

(東北大学加齢医学研究所准教授)

分担者：野澤 孝之

(東北大学加齢医学研究所助教)

鄭 嫣婷

(東北大学加齢医学研究所研究員)

研究費：物件費15万9千円，人件費4万1千円

[2] 研究経過

外国語（第二言語）習得の脳科学研究は、グローバル化に伴う外国語教育の重要性と2つの言語を習得することの認知的なメリットが提唱され、近年ますますその重要性を増している。本共同研究では、学習者が外国語コミュニケーション活動中に言語的な間違いに気づくかどうか、その神経基盤を解明することを目的として研究を行った。さらに、外国語教育が専門の申請者（鈴木）が、脳科学研究者（杉浦、野澤、鄭）と共同研究を行うことで、学外研究者との交流、ネットワークの拡大、新研究領域の開拓を目指すものである。

以下、研究活動状況の概要を記す。

1. 打ち合わせ

日時 2014年6月5日（木）

10:00～12:00

場所 スマートエイジング棟6階セミナー室

参加者 杉浦、野澤、鄭、鈴木

内容 脳科学的手法を用いた外国語教育研究の可能性についてのディスカッションを行った。

2. 研究会

日時 2014年9月13日（土）

13:00～16:00

場所 宮城教育大学附属図書館スパイラルラボ

参加者 杉浦、野澤、鈴木、板垣信哉氏（宮城教育大学教授）、高橋潔氏（宮城教育大学教授）、佐久間康之氏（福島大学教授）、高

木修一氏（福島大学講師）、上羽宏明氏（石巻専修大学講師）、小・中・高等学校の英語教師約20名、合計25名

内容 脳科学者による話題提供（杉浦『脳機能イメージングを英語教育に応用する：基礎と考え方』、野澤『脳のダイナミクスとインタラクション：注意、動機、集団コミュニケーションの研究事例』と、英語教育研究者や英語教師とのディスカッション）

3. 実験の準備

日時 2015年1～2015年3月不定期

場所 宮城教育大学9号館鈴木研究室

参加者 鄭、Adrian Leis氏（宮城教育大学准教授）、大和田桂子氏（リサーチアシスタント）、鈴木の4名

内容 2015年4～7月に行う実験の実験材料の作成。（その音声刺激を用いて予備実験を、2015年4月に、日本語母語話者と英語母語話者複数名を対象として行う予定である。）

[3] 成果

(3-1) 研究成果

本年度は、2015年4～7月に実施予定の実験の刺激文（和文400個、英文400個の音声刺激）を作成することができた。

(3-2) 波及効果と発展性など

第一に、本共同研究を通して、東北大学加齢医学研究所、宮城教育大学、福島大学、石巻専修大学等との研究者の交流・ネットワークが飛躍的に活性化した。

第二に、本共同研究は、脳科学の外国語教育への応用という新しい研究領域の開拓（萌芽的研究の発見）に結びつき、今後の発展が期待されている。今後としては、平成27年度も本共同研究を継続し（申請中）、鈴木を代表者として、外国語コミュニケーションに関わる認知プロセスを研究としてきた佐久間

氏と高木氏、脳科学の専門家である杉浦、野澤、鄭を共同研究者に、平成28年度科学研究費基盤研究(B)に申請予定(仮題目:外国語コミュニケーションに関わる神経基盤の解明)である。

[4] 成果資料
準備中